

本館展示新構築のための指針－展示基本構想 2007 補遺－ 要約と整理

0. 「展示基本構想 2007 補遺」の位置づけ

「展示基本構想 2007 補遺」は「展示基本構想 2007」を踏まえたものであり、両者はひと組のものとして位置づけられる。

1. 21 世紀における「民族学博物館」の必要性

民族学博物館は、広義の人類学（自然人類学と文化人類学を併せたもの）が担っている「ヒト」と「人間」とは何かという問いのうち、異文化理解を通じて社会的・文化的存在としての「人間」（あるいは人類）とは何かを考え続けるための場を提供するという機能を担っている。

現世人類（ホモ・サピエンス）の生物的、そして社会・文化的な最大の特徴は、生物的には 1 属 1 種でありながら、社会的、文化的には豊かな多様性を示している点にある。人類学は、人間の文化的多様性、すなわち人間が様々な環境の中でいかにして生きているのかを探求し、そうした異文化理解を通じて「人間とは何か」という根源的な問いに迫る。

この「人間とは何か」という問いがとりわけ 21 世紀になってなぜ必要か。それは、人間の最大の特徴である社会・文化的多様性が情報・知識・活動のグローバル化で収束しつつあるからである。その一方で拡散（つまり新たな多様化）も起きているのだが、そこにまた人間あるいは人類の本質の一端が現れる。今日のグローバル化時代における民族学博物館の役割は、異文化理解のための展示を通して、人間、人類の本質を理解するための場を提供することにある。

2. 本館展示（地域文化展示と通文化展示）の基本方針

A) 明確な展示方針を展示場で明示する。

B) 「ユニヴァーサル・ミュージアム」の理念を明確にし、対応すべき項目を優先度別に絞り込む

C) 現代の人々の生活、文化の表層に見える部分だけでなく、その基層にあるもの、その本質に迫る部分を理解してもらえ展示を目指す

3. 地域文化展示を新構築するための具体的な作業上の指針

a) 地域（地点）、民族の選定

当該地域の全域を一度展示プロジェクト・チームで概観し、チーム内で合意を得た上で選定する。また、その選択がその地域の展示にふさわしいものであること、その展示の構成が適切なものであることを、チームとして館員に説明できるようにする。

b) 地域、民族のアイデンティティの核

その地域、民族のアイデンティティの核となるものとは、言い換えれば文化の「本質的」な部分である。「フォーラムとしての展示」、「開かれた展示製作」という精神は生かしつつも、「本質主義批判」や「構築主義批判」を恐れているは、「常設展示」と呼べる展示は

「構築」できない。さらに、地域、民族のアイデンティティの核となる文化を表象する資料のいくつかは、民博のシンボルとなる展示資料となればもっとよい。

c) 文化的・歴史的背景を探る+現代における活用の様子

展示される資料や情報は、まず展示される側の社会あるいは文化全体が織りなす文脈（コンテキスト）の中に生きていなければならない。したがって、展示される資料や標本には、文脈が明確に読み取れるようなバックデータを、解説プレートや映像・音響資料との組み合わせなどの展示技術の工夫で示す必要がある。

d) 地域展示における通文化的視点

地域（地点）、民族の歴史的・文化的な背景や文脈から切り離れた形での標本資料や映像・音響資料の展示も場合によっては必要である。そのためには、テーマによっては「集合展示」という手法も積極的に活用されて良い。

各地域展示プロジェクト・チーム間で調整をして、共通のテーマをいくつか設定し、関係する資料をできる限り展示する。

4. 通文化展示を新構築するための具体的な作業上の指針

地域展示プロジェクト・チーム間で調整して、共通のテーマを設け、それに関連する資料を何らかの形でできるだけ出展する方向性を模索する。また、共通テーマとされなかったテーマでも、あえて見る側がそれを念頭に置いて観覧すると、興味深い通文化的な展示に見えるという場合もある。計画された通文化的見方を提供することと、展示する側が予期しなかった見方を来館者に発見してもらうことの両者が併存することで、より奥行きのある深い展示空間ができる。

特定の物質文化や特定のテーマを通文化的に研究する常勤研究者が中心となって、共同研究あるいは共同の文化資源プロジェクトとして、展示の通文化的な観覧方法やコンテンツの開発、情報蓄積などを行うことは可能であり、それが「民族学博物館」の可能性をさらに広げることになる。

5. 展示新構築のあたっの体制の整備

A) 展示プロジェクト・チーム外部メンバーの地位を整備する。

B) 展示更新を可能とするシステムを整備する。

6. 「民族学博物館」という名称について

20世紀末から21世紀の「民族学博物館」は、その機能が大きく拡大した。社会的な側面を大きく取り上げなくてはならなくなり、社会人類学や文化人類学に特有で、狭義の民族学では扱われなかった諸問題をも展示に取り入れることになった。しかし、その根幹にはやはりかつての民族学の伝統が息づいている。というのは、資料の収集、整理、保管、展示のノウハウは民族学博物館に蓄積されたものであり、その基礎にあるのは狭義の民族学である。民族学博物館が、人間の多様な文化と社会的・文化的存在としての「人間」を探究するための学際的な共同研究の場であるためには、やはり「民族学博物館」と名乗る方が求心力を得やすい。名称の問題は単に、本館を規定する法律の問題だけではない。